

## 児童養護施設における入所児の「食」の問題と課題<sup>†</sup>

宇賀神民代\*・山崎 久子\*・木村 壽子\*・金崎芙美子\*

宇都宮大学教育学部\*

「食の乱れ」が大きな社会問題になっている。偏食（過剰な脂質摂取等）、孤食、朝食抜き、異味、ダイエットなど、多様な様相を呈している。このことは身体の健康のみならず、心の健康や発達にも暗い影を落としている。このような時代を背景に、食ならびに食育の重要性が改めて認識され、食育基本法（H17.6）が制定された。その前文には、「子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも『食』が重要である」こと。とりわけ、「子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである」と謳っている。

「食」の問題は、今日、全ての国民に共通する問題として認識されているが、その問題がもっとも顕著な形で現れているのが、児童養護施設の子どもである。本研究では、児童養護施設入所児の「食」の実態を把握するとともに、養育における「食」のあり方について検討するものである。

キーワード：食育、児童養護施設、栽培、調理、欠食、飢え

### 1. 「食」することの意義

#### （1）生命維持の役割

食することの意義は、食を通して生命活動に必要な栄養素を取り込み、生命の維持と発展と、疾病異常の予防、さらには健康の増進が図られるところにある。人は日々「食」う。食うことで命を繋いでいく。人は、外部から体内に食物を取り込むことで、生命維持に必要な栄養素を摂取し、エネルギーをつくり出している。人の生命は、生きるために体外から体内にものを取り込むこと、すなわち「食う」ことを運命づけられている。生命維持に必要なエネルギーと栄養素をわずか1個の錠剤に変えたところで、ま

た口腔以外からの摂取形態をとったとしても、体外から体内へエネルギーと栄養素を取り込むということに変わりはない。生ある限り、人は食うことから免れないのである。食うことは生きるための必要絶対条件である。

食うことが生存の根本に横たわる問題であることを、端的に示すのが食性と言えよう。肉食性が草食性か、雑食性かなど、さまざまな食性がある。動物は、それぞれの食性に適した口腔や骨格の体構造、さらに消化・分解酵素などの体機能をもっている。それぞれの動物が辿った進化の過程において、「食う」ことに適応することは大きな比重を占めており、食うために、体構造や機能を変化させるに至ったのである。

#### （2）心と「食」

今日、「食」は心の問題と関連して論じられることが多くなった。「食」と心との関連性の深さは、空腹という生存に関わる不快を開放する食

<sup>†</sup> Tamiyo UGAJIN\*, Hisako YAMAZAKI\*, Toshiko KIMURA\* and Fumiko KANESAKI\* Problems and issues of meals of the children in Residential care institution for children

\*Faculty of Education Utsunomiya University

体験が大きく影響して、快不快の分化がはじまり情緒が発達していくことから明らかである。

乳を飲ませてもらうと、やがて自ら食物を摂取するようになるとは言え、幼い子どもの場合は、自ら食物を用意し摂取することはできない。親など他者から食事を与えられることで、子どもは生理的欲求や情緒の安定を得、さらには信頼感や愛情を芽生えさせていく。また、順番待ちや譲り合い、分かち合いという社会的行動を身に付けていく。食によって一日の生活サイクルや季節感が身についてくる。食卓での会話やくつろいだ関係を通して、感情の収め方などを学ぶこともできる。おいしいものを共に食する楽しさは生きることの楽しさを子どもに実感させるであろう。

以上のように、食生活は実に多様な「人間としての行動の学習」<sup>1)</sup>を内包している。こうした食の営みが生活の中でごく自然に行われることで、人間らしい生活を築き営なもうとする意思を持つようになるのである。

### (3) 「食」と自立

他に依存した状態から心身ともに自立に向かうところに、人としての成長や豊かさは認められる。食のもつ3つ目の意義として、食行動が人の自立に深く関与することが挙げられる。前述のように、食は人間の生存そのものに関わる。このことを勘案すれば、「食」が人間としての自立の基本的要件であることは誰しも認めるところであろう。

しかし、生理的早産と言われる人間の場合は、自分の手を使って一人で食べるという行為すらも、最初からできるわけではない。いわゆる基本的生活習慣の獲得を経て、ようやく自分の意思で食べられるようになるのである。また、自分一人で行えるという能動の喜びや有能感を実感することは自我の発達を大いに促し、子どもの中に自尊感情を芽生えさせる。

さらに、何を食べるのか、どのくらい食べるかを自分で選択し自ら決定することは、自立する上で重要である。保育園や幼稚園の中には、食に関する自己選択・自己決定を重要な保育目標と掲げ、今日の食育ブームの遥か以前からバイキング給食として実践を重ねているところがある。

バイキング給食は、食材や料理ごとに並んだ器から、自分が食べたいと思ったものを自分が食べたいだけ選びとり食べるというスタイルである。自分で選ぶというときに、同じものばかりを食べる場合は栄養的に心配されるが、自分で選び決定するという自由と同時に、自分が選んだ行為に子どものなりに責任をもっていくという自己責任の感覚や、自分の食べられる分量を考えて選ぶという知的体験が主体的で自立的な人間へと導いていくのである。

## 2. 児童養護施設入所児の「食」

### <入所前の「食」の状況>

児童養護施設入所児は、親から遺棄され、「食」に餓えた子どもたちである。母の乳房にすぎることままならず、成長に必要な栄養バランスのとれた食事を摂取することもできず、家族団欒の温かな雰囲気も知らない。そのような子どもたちの、「食」に対するすさまじい行動事例を以下に紹介しよう。内容は個人情報厳守するため、本質を損なわないように改変している。

#### 【事例1】

Aは、両親と生活出来ず、他の養育者に養育されていたが、Aに対して食事を与えないなどといったことが続いたため、児童相談所に保護され、児童養護施設に入所をした。あるとき、施設内で“万引き”についてのディスカッションを行っていたところ、Aより、次のような発言があった。

A:「万引きしたことあるよ、じいちゃんたち

が酔っ払うと、飯作ってくれねえから腹減って、コンビニでツナマヨおにぎり万引きした」「お墓のお供物を取ってきて食べた。家の人が取ってこいと言ったから。パシリっていうやつ」

このことから分かるように、「飢え」は子どもだけでなく、一緒に生活する者が皆、「飢え」にいるということがよく分かる。

#### 【事例2】

Bは、精神的な病気をもつ母親と二人で、生活保護を受けながら生活をしていた。母親の病状が悪化するたびに、色々な児童養護施設に短期入所をし、母親の調子が良くなると家庭に戻るといった生活を繰り返していたが、母親の病気の悪化により、児童養護施設に入所をした。

B：「(生活保護費が入るとすぐに、母親が酒代等に費やしてしまうため) お金が入る 10 日ぐらい前から、家には何も食べるものがなかったんだよ。カップラーメンもないんだよ。だからね、学校に行くのが楽しみだったんだ。だって、給食が食べられるじゃん」

#### 【事例3】

Cは、ホームレスの両親と生活保護を受けながら生活をしていた。お金が入ると、大盤振る舞いで贅沢(食事やギャンブルなど)をし、なくなると借金で生活し、借金の取立てから逃げるために、Cを連れてホームレス生活をするということを繰り返していたが、両親が養育を放棄したため、Cは、児童相談所に保護され、児童養護施設に入所をした。

あるとき、Cが、学校から抜け出し、施設に戻らなかった。家出である。学校の教師と施設職員が手分けして搜索したが、なかなか見つからず、2時間半後、施設職員によって無事に保護された。帰園後、事情を聞いた。

C：「みんなに馬鹿にされたり、いじめられて、学校にいたくないし、施設にもいたくないから、家出しようと思った」「学校の裏門から出て、知

ってる道を歩いて、デパートに行こうと思った。デパートなら、試食があるし……」「歩きながら、自動販売機の下とか見て、お金落ちてないかなあって探したら、100 円見つけたから、コンビニでピザまんを1個買って食べた」「でも、まだ、お腹がすいてたから、やっぱり試食のところに行こうと思って、警察や施設の人に気づかれないように隠れながら、Fデパートに行った」「でも、試食がなくて、お金も落ちてなかったから、今度は、Yスーパーマーケットに向かって行ったんだけど、Yにも試食がなくて、お金も落ちてなかったから、もう、お腹すいて、疲れちゃったし、施設に帰ろうと思って歩いてたら、Eさん(搜索中の施設職員)に見つかった」

なんとか「食べ物」を手に入れようと、目的意識を持って行動した。「生きる」ために「食べる」ことを切実に感じ行動するCの姿があった。

#### 【事例4】

Dは、母子家庭で生活保護を受けながら母と二人で生活をしていた。多額の借金を抱えた母親は、借金取りから身を隠すために、祖父母に子どもたちを預けたり、祖父母に借金をして、子どもを引き取るなど繰り返していたため、児童相談所にD兄弟は保護され、児童養護施設に入所した。

借金取りから逃げる(隠れる)ために、親子三人、ポテトチップス1袋で1週間生活をしてた時期もあったようでDは入所間もない頃、異常なまでの食欲を見せていた。

#### ＜入所後の「食」の状況＞

入所前「食」に餓えた子どもたちは、入所後どのような行動をするのであろうか。施設内における食にまつわるエピソードは次の通りである。個人情報については、本質を損なわないように改変して呈示した。

#### お菓子とのかかわり

施設では、朝食・昼食(就学児は学校給食)・

夕食の他に、就学前の幼児は、10時と15時、小学生は15時の間食が与えられる。内容は、菓子類のほか、手作りのケーキやゼリー、季節の果物や草もち、アイスクリームなどである。また、夕食後、全体活動（勉強、音楽指導、行事に関する劇等の練習など）があるときなどは、お菓子を食することがある。

#### 【事例1】

小学生9～10人が、小遣いを持って買い物へ出掛けた。帰園後、小遣い帳を記入するため、買ってきたものを職員が確認すると、全員、飴やガム、チョコレート、スナック菓子といったお菓子であった。中には、1000～1500円も買ってきた子もいた。また、そのお菓子を、他の子に盗まれないように、普段使われていない部屋のロッカーに隠したり、中学生にあげる（自主的・好意的あげる場合もあるが、生活ユニットの上下関係に関連し、“貢ぐ”というような行為であることもある）といった行動が見られた。

#### 【事例2】

夕食後の劇練習が終わり、1グループ3～4人のグループに分かれ、各グループ1袋ずつ、ポテトチップスを食べた。それぞれ、自分以外の子どもも食べられるように、子ども同士でいろいろなルール（「1枚ずつとって食べよう」と声を掛け合うなど）を決めながら食べていたが、幼児のMは、袋が開けられるとすぐ、自分のところへ半分ほどのポテトチップスを集め、ほぼ独り占めをして食べた。職員が、食べ終わったグループに、追加を置いていくと、職員の様子を見たMは、口いっぱいほおばり（詰め込み）、両手でポテトチップスを持ちながら、置かれたポテトチップスを、自分の近くへ集めた。Mに限らず、お菓子に対する執着は強い。

#### 外食時の様子

施設では、年に1～2回、「多様な食の経験」を目的に外食をする。外食先は、子どもたちか

らの希望を聞いて決める。

子どもたちの外食先の希望で1番多いのは「寿司屋」である。日常、集団給食のため、「生モノ」を食べられないことが関係しているのであろう。寿司屋（回転寿司）での子どもたちの様子であるが、おおよそ、小学生で10～15皿、中学生女児で20皿、中学生男児は25～30皿近い量の寿司を食べる。中には、食べ過ぎて吐く子もいた。

また、ファミリーレストランに行ったときは、自分がオーダーしたものを食べながら、追加を繰り返し食べ過ぎて、気分が悪くなったということがあった。バイキング形式のレストランにおいても、一人で3皿山盛りに料理をもってきて、短時間に勢いよく食べる姿などがみられた。

以上の事例からも分かるように入所前に食に飢えた子どもたちは入所後も「食べること」に固執する傾向がある。

### 3. Z 児童養護施設における「食」に関する実態 —面接調査をもとに—

「食」とのかかわりが希薄であった入所児を対象に日常生活のなかで、卓上にのぼる家庭料理や食材をどの程度理解をしているかについて調査し、日常食から阻害された子どもたちの実態を把握した。施設入所児に日本の日常の食生活を体験させることが子どもの家庭的感覚を培う上で有効であると考えたからである。（調査内容）

#### ① 食材名の認知度について

栽培等経験のある食材(21種類)を含め、食材42種類(さつまいも、さやいんげん、小松菜、とうもろこし、なす、すいか等)の食材カード<sup>2)</sup>を用いてその食材の名前を知っているかを尋ねた。

#### ② 料理名の認知度について

料理34種類(秋刀魚の塩焼き、肉じゃが、ひじき煮、切干大根の煮物等)の料理カード<sup>3) 4)</sup>を用

いてその料理の名前を知っているかを尋ねた。

(調査方法)

調査の対象は Z 児童養護施設入所児童 19 名(幼児 3 名、小学生 10 名、中学生 6 名)である。2006 年 2 月中旬に 3 回にわたって同施設に出向き、入所児一人ひとりに食材や料理のカードを見せ、名称を答えさせ認知の有無を確認した。

(調査結果および考察)

① 表 1 は年齢別食材名の正答率を示したものである。幼児、小学生(4 年生)までが 50%台に対し、小学生(5 年生)以上では 80%を越えていた。これは生育年齢にともなう経験を含めた知識の増加と考えられる。特に小学 5 年生からは家庭科の授業が加わることで「日常の食事に関心をもつ」ことや「日常よく使用される食品」についての学習をとおり理解が深まったためと思われる。調査中にも「学校で教わった!」といった声が聞かれた。

表 1 年齢別食材名の正答率 (%)

	6 歳	7-10 歳	11-12 歳	13-15 歳	合計
未栽培	46.0	54.8	81.0	77.8	63.4
栽培等	58.7	60.1	83.3	82.5	69.4
計	52.4	57.4	82.1	80.2	66.4

② 栽培経験のない食材名と栽培等経験のある食材名の認知について、いずれの年齢層においても栽培等経験のある食材の認知度が高かった。幼児は 12.7 ポイント、中学生は 6.0 ポイント、次いで小学生(4 年生)までが 5.3 ポイント、小学生(5、6 年生)2.3 ポイントの順であった。特に、幼児期における栽培等の体験をとおり食材名についての認知学習効果の高いことが分かる。

③ 表 2 は年齢別料理名の正答率を示したものである。食材名の認知同様、幼児と小学生(4 年

生)までと、小学生(5 年生)以上とに差が見られた。特に中学生は調理を行なっている一方で部活や受験準備のための塾通い等で栽培等に関らないことが食材名の認知に比較し料理名の認知がわずかにばかりではあるが高い結果になったと思われる。

表 2 年齢別料理名の正答率 (%)

	6 歳	7-10 歳	11-12 歳	13-15 歳
料理名	47.1	51.8	79.4	82.4

#### 4. Z 児童養護施設での取り組み

##### (1) ユニット調理

施設では、自立支援活動の一環として、男子ユニット・女子ユニットに分かれて土日の夕食づくりを子どもたちで行っている。調理を行うユニットキッチンには、電磁調理器の大小コンロが計 3 台、グリル 1 台、電子レンジ 1 台、冷蔵庫 1 台がある。調理をするのは中学生以上であるが、配膳や食器洗い等を小学生が手伝う形で進めている。ユニット調理に関する料理名と調理回数については、表 3 に示した通りである。

##### <ユニット調理の分析>

ユニットにおける調理を分析した結果、以下の事が明らかとなった。

① ユニット調理をみると毎月 1~2 回は、同じ料理が出てくる。これは、繰り返しの調理であり、主食、単品(主食+主菜)、主菜、副菜ともに、食材や調味料で変化をつけている。この繰り返し調理によって技術が高まり、応用調理へと展開できることが示唆された。

② 井もの、カレーなど 39 回と単品料理が多い。特に、カレー、ハヤシの類は同じ調理過程を経、調味料としての出来合いのルーを用いることで料理に幅を持たせている。一般にカレーは子どもの好む料理として常に人気のある料理

であることから、この施設においても、残食が少なく、御代りなどもあり、作り手である子どもの喜びは大きい。同様に、子どもたちに好まれる丼もの、チャーハンといった主食であるご飯が中心の献立では、通常のご飯量が不足してしまうこともある。しかしながら、子どもの健康を考えたときに、塩分、油などの過剰摂取につながる事が懸念される。

③ 調理方法から見ると、一鍋で作ることのできるものが多い。これは、調理スペースが狭くても、また器具が少なくても、さらには技術が未熟であっても、誰にでも調理可能であることを示すものである。

④ 揚げ物、蒸し物、焼き物料理がなかった。安全管理上、幼児や小学生の多い生活ユニットにおいては、揚げ物は火傷の危険性を考慮してのことと思われる。また、10～13食をまとめて作ることから、焼き魚等の焼き物は、短時間の調理では出来ない。今後、計画的に調理実習を

の変化について述べたい。

① 男子ユニットでは、カレーやハヤシ、中華丼など大鍋での調理の際に、水を大量に加え量を増やしている。そのために何度も御代りをすることはできるが、時として量が多すぎて残してしまうといったこともあった。しかし、回数を重ねるごとに適量の調理ができるようになってきている。

② 味を付ける・焼く・炒める等の調理作業は人気があり、皆、やりたがるが、材料を切る・調理器具を準備する・洗い物をするといった作業は避けたがる。1ユニット3～4人による作業となるため、おおよそ、同じ子が毎回同じ作業をする傾向にある。その為、調理を指導する職員が声を掛け、それぞれの子が、色々な作業をできるような環境設定を心掛けている。

③ 繰り返しの調理によって、調理方法等を知っている料理(カレーやハヤシなど)に関しては、子どもたちだけで作りたいという要求があるた

表3 ユニットでの料理名と調理回数

主 食		単 品		主 菜		副 菜	
ごはん	31	丼ものの類	11	鉄板焼き類	7	サラダ	36
変わりご飯	6	カレー類	11	煮魚	5	炒物	7
		ハヤシ類	6	ムニエル	1	冷奴	2
		炒飯類	3	おでん	1	煮物	11
		オムライス	1	鶏と大豆のトマト煮	1	和物	6
		麺	1	ハンバーグ	1	茹物	3
				牛肉と野菜の炒物	1		
				しゃぶしゃぶ風	1		
				麻婆茄子	1		

行うなどし、未経験の調理についても経験する機会を設ける必要があると考えられる。

#### ＜調理を通した行動の変化＞

ユニット調理を通した子どもたちの心や行動

め、調理指導者は、口を出さずに見守るようにしている。そうすることで、「自分達だけで出来た」と自信がつき、「また作ろう」という意欲がわいてくるようである。作れる料理のレポート

リーが増えて、「今度は〇〇を作りたい」というように、新しいことにチャレンジしたいという声が聞かれるようになった。また、料理へ関心をもち、日常の食事の場面においても「これ、おいしいね。どうやってつくるの?」と栄養士や調理員に尋ねる場面が見られるようになった。

④ 少人数で食事を食べることから、中高生が小学生や幼児を気づかう場面があり、中高生自身の言動に変化が見られる。逆に、配膳を中高生が行うために、特に男子ユニットにおいては、自分たちの分量を多めに取り、小学生や幼児の量が少ないといった課題が残っている。

⑤ 「〇〇くんの作ったごはんが食べたい」というように、食事を楽しみにする幼児の姿が見られる。また、好き嫌いの多い幼児が、「〇〇くんがつくった」ということもあり、野菜など残さずに食べる姿が見られる。

⑥ 食事の雰囲気が楽しいものとなり、通常の食事の際、マナーの悪さ（ふざける、汚い食べ方）が目立つ小学生や幼児が、きちんと座り、きれいに食べている。

⑦ 日常の食事では、小学生達は自分の食べた食器を洗い場に運ぶだけで、机を拭く、床をきれいにするといった姿は、あまり見られない。しかし、ユニットでは自主的に後片付けを行っている。

#### <考察>

児童養護施設入所児の多くは、施設退所後も家庭復帰が困難である。このことから、児童養護施設に生活する子どもたちは、一人暮らしのための生活スキルの習得が大きな課題となっている。自立支援の一環として行われるユニット調理では、副菜として必ず野菜料理が付く食事をととのえることで、将来、自ら食事を作るときにどんな献立をたてればよいのかという目安が持てるように工夫されている。

また、ユニットの食事の際は、自主的に食器

運びや片付け、皿洗い、机拭きなどを行う姿が見られる。中学生が調理を行うことで、自分自身も、ユニットで生活をしている生活者としての意識が高まるからであると考えられる。

キッチンが家庭生活の上で最も大事だと考えられる。大舎製の施設では、食事は厨房で作られ、それを配膳して食べるという、給食型に近い施設が多い。しかし、本調査を行なった施設では台所と食堂が一体化されたユニット型で、調理する者とのコミュニケーションがはかられ顔を見合わせて調理のできる対面キッチン式である。中学生が食事をつくる姿が見える。野菜を切る包丁とまな板からの音や炒める音。部屋全体に漂う料理のにおい。煮炊きをする湯気の温かさ。調味の味をみる。といった五感を通した刺激に触れ、「食」とおして子どもたちの成長がはぐくまれていく。

このようなユニットキッチンからは「食」を支える調理の役割分業化、つまり「作る人」と「食べる」人の距離が大きく開くことはない。土曜、日曜の週2日間は施設給食ではない、「食」本来の「食すること」の楽しさや家族にも似た子どもたちの心の交流を満たすことができる。作り手の姿が見えない調理室と違って子どもたちとの心の「関係性」を築くことができる。生活の場で生活をともしにする子どもが直接食事作りに関わることは「食」のみならず人間関係の確かな自立を支える土台のひとつとなる。

#### (2) 畑と野菜づくり

施設では、「労働」の大変さと尊さを子どもたち自身が体で感じる、「生き物」の成長を見守ることで豊かな感性を養うこと、自分の食べるものが「命」であることを知り、「食べ物」への感謝の気持ちを持つこと、また、土によって傷ついた心を癒すといった目的で「畑づくり」を行っている。

#### <畑作りの概要>

① 土に肥料を入れて耕し、畑の基礎となる土作りを行う。

② 子ども会議によって、植える苗および種を決める。栽培した野菜等は表4の通りである。

表4 栽培野菜・果物名

さつまいも・じゃがいも・大豆・えだまめ・さやいんげん・さやえんどう・かぶ・かぼちゃ・きゅうり・小松菜・しそ・とうもろこし・トマト・なす・にら・ねぎ・ピーマン・赤ピーマン・ほうれんそう・いちご・すいか

③ 苗・種を準備する(購入したものもあるが、前年度栽培して収穫した種子も用いている)

④ それぞれのうねに苗植えを行う。

⑤ 作物の成長過程を見ながら、水やりや草取り、芽かきなど必要なことを行い、花が咲き、実が実ったら収穫を行う。

⑥ 野菜を収穫し、食事等で食べる。また、調理が不要な野菜については、戸外遊びの際、畑で食べる。

⑦ 野菜の収穫時期が終了すると、枝豆など種にすることの出来る作物は、干して、種づくりをし、その他の枯れた作物に関しては、土から抜いて、畑の肥やしにする。

#### <畑に関する行事>

① 年に1回、収穫した「さつまいも」を用いて、「焼き芋会」を行う。「焼き芋会」は、民生委員やボランティアの方たちに協力して頂き、地域の方たちとの交流の場となった。

② 「七夕」「十五夜」など日本の伝統行事の際に収穫した野菜を備え、昔の人たちが作物に対してどのような「おもい」を込めて、行事を行ってきたかを知る機会を設ける。

#### <畑と野菜づくりを通した行動の変化>

「畑作り」を通して子どもたちにどのような心の変化や行動の変化が現れたかについて紹介

したい。エピソードの本質を損なわないよう、個人情報等について改変して呈示する。

① 幼児のSは入所当初から野菜が食べられず、便秘体質のため整腸剤を服薬していた。食事の際に、担当者をはじめ職員が、声を掛けたり、口に運んだり、時には、調理の段階で野菜と分らないように細かく刻んだりと色々な方法で野菜が食べられるように関わってきたが、なかなか、食べることができなかった。しかし、初めて、自分でキュウリを収穫したとき、「Sのキュウリ」といって、畑の真ん中で、キュウリをかじった。その後も、食事時に野菜を好んで食べないまでも、少しずつ野菜が食べられるようになり、畑作業のときなどは、トマトを丸齧りするなど、自ら野菜を食べる姿が見られた。

② 幼児Jは、戸外遊びが好きで、夏の間、毎日、畑で遊んでいた。あるとき、職員の紫色のジャケットを指して、「ナス色だ、ナスの色だ」と言った。

③ 小学生のRが、さつまいもの収穫のときに、職員へこうたずねた。「昔の人は、さつまいもを年貢にしていたんでしょ？」学校の社会科の時間に習ったことが、自分が働くなかで思い出されたのであろう。

④ 収穫が終わり、全ての作物を抜いたとき、小学生たちから、「畑がなくなっちゃったね・・・」「来年も作りたい！」等という声が聞かれた。作物のない畑は、畑ではないと認識しているようである。

⑤ 栽培する作物のなかで、子どもたちからの要望の多い作物は、「すいか」である。「トマト」や「ピーマン」、「きゅうり」といった声もあり、普段の食事のときに、野菜で苦戦している子どもたちも、自分達が育てる野菜は、実りの確実なものを選んでいるようである。





写真1 畑での作業風景

#### <考察>

畑や野菜づくりを通して、子どもたちの「心」は癒される。児童養護施設に入所している被虐待児は、虐待環境の中で、自分の存在を否定され、価値を奪われてきた。同様に、自分を取り巻く「環境」が「危険」な場所であったため、危険に対する過敏性や強い攻撃性を持っている。

また、親が自分を「見捨てた」「暴力をふるった」ことへの「激しい怒り」と「親とつながりたい」という気持ちが交錯し、「親への怒りを抑圧（切り離し）」することから、「激しい怒りの対象」が拡散する。子どもたちは、施設における日常生活のいろいろな場面で、他の子ども、職員、時には壁やドアに対して、罵声を浴びせたり、暴力を振るったり、破壊をしたりする。

しかし、そのような子どもたちが、汗だくになり、真っ黒に汚れながら、畑で作業をしているときは、非常に清々しい表情をしている。畑には「命」がある。「野菜」も「虫」も、それらを育てる「土」にも、あたたかい「命」の営みがある。その「命」に触れ、発見し、何かを感じ、さらに「命」を自分の手で造り上げることによる「喜び」や「達成感」、そして何より、今、自分が触れている「命」は、自分を「見捨てた」親のように、決して、自分の前から急に姿を消したりしないという「安心感」こそが、彼らの傷ついた「心」の癒しになるのではなかろうか。畑は作物を育てるだけでなく、子どもたちの「心」を育てていると考えられる。

- 1) 高野陽・高橋種昭・大江秀夫・水野清子・竹内恵子・佐藤加代子：子どもの栄養と食生活，医歯薬出版株式会社，2005年，P21
- 2) 足立巳幸監修・針谷順子：実物大そのまんま食材カード，群羊社
- 3) 足立巳幸監修・平本福子：五訂改定版そのまんま料理カード 第1集 手軽な食事編，群羊社
- 4) 足立巳幸監修・平本福子：「五訂改定版そのまんま料理カード 第2集 ちょっぴりごちそう編，群羊社